

難聴者における情報保障の選択に関わる要因

— 1事例を通じた検討 —

石田 祐貴

筑波大学人間総合科学研究科

岡田 雄佑

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター

背景と目的

- 「両耳の聴力損失が60dB未満又は補聴器を使用すれば通常の話声を解することが可能な程度」と定義される難聴学生は、高等教育機関に在籍する聴覚障害学生の約75%を占め、その中で支援を受けている学生は約62%と報告されている (日本学生支援機構, 2023)
- 聴覚障害学生の支援に対する受け止め方や意思表明スキルの獲得プロセスの検討では、支援の段階を経るにつれて、学生自身が支援ニーズについて意識し始め、自分に合った情報保障手段を模索し、授業形態に合わせて手段を選択する段階に至ることが示されている (有海・羽田野, 2022; 吉川, 2016)

本報告では、多様な情報保障を経験してきた難聴学生の1事例を取り上げ、受けてきた情報保障の変遷やそれに関わる経験を整理するとともに、高等教育段階に焦点をあてて情報保障の選択に関わる要因について事例的に検討を行った。

報告事例に関する基本情報

【きこえについて】

- 混合性難聴 (身体障害者手帳3級)
- 裸耳聴力: 右耳 90~100 dB 左耳 85~90 dB

【日常生活におけるきこえ】

- 埋め込み型骨導補聴器 (Baha@Cochlear) 装着
- 装着時聴力: 20~30 dB (右耳のみ装着)
- 日常的に音声言語でコミュニケーション

きこえへの影響要因

(雑音, 物理的距離, 声質とボリューム, 疲労感 etc.)

【コミュニケーション手段】

- 聴覚口話 (幼少期からのメイン) 手話 (高校時代に習得)

Table 1 教育歴と情報取得方法の変遷

| 教育段階 | 教育環境 | 講義・授業での情報取得手段・ツール・支援 | 教育段階 | 教育環境 | 講義・授業での情報取得手段・ツール・支援 |
|------|----------------------|------------------------|------|----------------------------|--|
| 幼児期 | 地域の幼稚園 難聴児通園施設 | ・補聴器 | 大学 | 私立大学 (専攻: 社会学部) | ・補聴器 ・文字通訳 (ノート・PC) |
| 小学校 | 地域の小学校 通級指導教室(月1) | ・補聴器 ・補聴援助システム (FM) | 大学 | 国立大学 特別専攻科 (専攻: 特別支援教育) | ・補聴器 ・文字通訳 (PC) |
| 中学校 | 地域の中学校 通級指導教室(週1) | ・補聴器 ・補聴援助システム (FM) | 大学院 | 国立大学博士前期課程 (専攻: 障害科学) | ・補聴器 ・文字通訳 (PC) ・補聴援助システム (ロジャー) |
| 高校 | 聴覚特別支援学校 | ・補聴器 ・手話 | 大学院 | 国立大学博士後期課程 (専攻: 障害科学) | ・補聴器 ・文字通訳 (PC) ・補聴援助システム (ロジャー) |

※環境・状況に応じて組み合わせて利用

高等教育機関の講義の受講における情報保障

【講義における情報の取得方略】

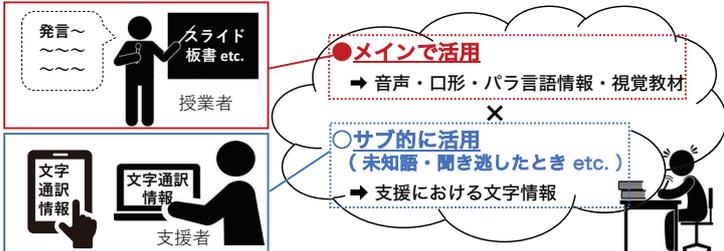


Table 2 講義形態における情報保障支援の選択と活用経験

| 講義形式 | グループディスカッション | 演習型講義 (スポーツ, 実習 etc.) | ゼミ・研究会 (15人以下) | オンライン講義 | 面談 | 発表会 |
|----------------|--------------|-----------------------|----------------|---------|----|-----|
| 文字通訳 (PCテイク) | ◎ | ○ | ○ | | | ○ |
| 文字通訳 (ノートテイク) | ○ | ○ | | | | |
| 音声認識システム | | | | | ○ | |
| 補聴援助システム | ◎ | | ○ | | | ◎ |
| 支援なしで受講 (支援不要) | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ |

※◎は優先的に選択および多く活用経験あり。○は状況に応じて選択および活用経験あり。

講義における情報保障の選択に関わる要因

- 講義の形態
- 講義スタイル (進行方法/資料の提示方法)
- 資料の配布の有無 etc.

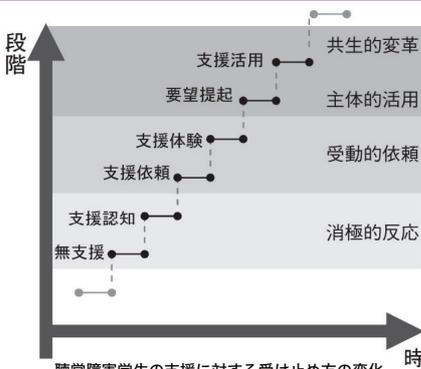


- 教室の広さ・音環境 (距離/マイクの有無)
- 受講人数 (騒がしさ)
- 聞こえやすい座席の確保のしやすさ etc.

- 授業者の声質・ボリューム
- 障害・きこえに対する授業者や受講者の理解
- 受講生の内訳 (同学部の割合/友人の有無) etc.

- 講義の位置付け (必修科目/発表会 etc.)
- 講義日の時間割スケジュール (疲労感)
- 選択できる情報保障支援の種類 etc.

リソースを主体的に活用する力を育むために — 考察



- 自由な選択の余地: オリエンテーションを活用した試用期間 etc.
- さまざまな経験: 多種多様な講義の受講, 支援に関する知識, 支援者養成への関わり etc.
- 大学生生活全般のサポート: 支援室の活用, 先輩とのつながり, 時間割作成のアドバイス etc.
- 自己・障害理解の深まり: 聴覚障害に関する知識, 自身のことを語る機会 etc.
- 面談と養成講座への参加: 支援室や支援担当者とのつながり
- 行事を利用した支援体験: 入学式・オリエンテーション等でのPCテイク (個別/全体) etc.

【文献】

有海真子・羽田野真帆 (2022) 聴覚障害学生の意思表明スキル獲得および活用プロセスの検討. 障害科学研究, 46, 13-26.
日本学生支援機構 (2023) 令和4年度(2022年度)大学・短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書.
吉川あゆみ (2016) 聴覚障害学生の意思表明とその支援. 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (編), トピック別聴覚障害学生支援ガイド PEPNet-Japan TipSheet 集 (改訂版), 筑波技術大学, 40-42.